

羽毛製品講習会を開催いたしました。

【羽毛ふとんの知識啓発事業】

市民向け講座「なるほど!知っ得講座」 (NPO法人消費者支援ネット宗像)

平成27年1月27日(火)NPO法人消費者支援ネット宗像の依頼により、羽毛製品講習会を実施致しました。会場となった宗像市消費生活センターには、消費者の方が約20名集まり、羽毛の基礎知識のDVD放映、派遣講師(羽毛製品アドバイザー)の東洋羽毛(株)の佃光明氏、正絹羽毛ふとん(株)立花功氏による講習が行われました。講習の後には、展示見本として持ち込んだ羽毛ふとん、羽根ふとん、ダウンジャケット等の見本を消費者の方々に実際に触れて頂きながら、意見交換を実施しました。受講生の方からは「羽根ふとんと羽毛ふとんの違いや表示の読み方が理解できたので、今後の製品購入に活用する」など多くの感想が寄せられました。



羽毛製品アドバイザー派遣について

日羽協では、消費者関係機関等において、消費者の皆様を対象として実施されている消費者講座などに、「羽毛製品アドバイザー」を派遣し、「羽毛製品の正しい知識、選び方、取り扱い方」などの疑問点やご質問にお答えすると共に、羽毛製品を正しくご理解をしていただく活動を実施しておりますので、ご活用いただきますようご案内申し上げます。

1. 主な講座内容

羽毛製品(羽毛ふとん、ダウンウエア関係)の品質と価格、製品の選び方及びリフォームなど羽毛製品全般

2. 講師派遣に関する費用及び人数

講師派遣に関する費用は無料。ただし、会場設営等に関しては、主催者側でお願い致します。
参加者人数は、約30名以上。講演時間は、約120分程度です。

3. 講師派遣申込み方法

当組合にご連絡ください。開催ご希望日、場所等に応じアドバイザーを派遣致します。

電話 03-5649-2285



日本羽毛製品協同組合

日羽協ニュース

【編集発行】日本羽毛製品協同組合

【事務局】〒103-0025 東京都中央区日本橋茅場町3-12-4白鷺ビル7階

TEL 03-5649-2285 FAX 03-5649-2286 ホームページ <http://www.nichiukyo.org>

羽毛製品講演会を開催いたしました。



日本羽毛製品協同組合(日羽協)では、平成26年12月5日(金)羽毛製品講演会を開催し、組合員・賛助会員・関係団体47社から82名が来場しました。開会に際し、日羽協理事長柳場弘より挨拶があり、続いてNHG株式会社、秋山政徳氏により、「宇宙衛星ビジネスとその周辺」と題し講演がありました。

日本における衛星放送ビジネスの草創期よりその発展にご尽力されてきた中で、宇宙衛星ビジネスの今後の展望にはじまり、秋山氏が師と仰ぎ、



秋山 政徳氏

〈プロフィール〉

1970年3月 慶応義塾大学法学部卒業
1970年4月 伊藤忠商事株式会社 入社
1997年4月 伊藤忠商事株式会社
宇宙・情報・マルチメディアカンパニー
開発業務部長
2008年6月 株式会社スカパー JSAT ホールディングス
代表取締役社長
2013年7月 NHG 株式会社 取締役会長(現職)

伊藤忠商事(株)を総合商社に発展させた故瀬島龍三氏との思い出を語りながら企業論を解説。リーダーのあり方や変化への対応など、大変示唆にあふれた内容で、参加者からも大変好評をいただきました。

羽毛ふとんの基礎知識

安いふとんには、理由があります

羽毛ふとんは、決して安くはないお買物。安価なものを見つけても、手を伸ばす前に、一呼吸。その安さの理由をご紹介します。

羽毛ふとんと羽根ふとんの違い

水鳥羽毛のダウンが50%以上入っているものを「羽毛ふとん」、50%未満のものを「羽根ふとん」といいます。

ダウンが70から80%以上の商品であれば、かけふとんとしての機能は十分果たせます。ふとんの品質表示にある、ダウン90%なら「羽毛ふとん」。フェザー90%なら「羽根ふとん」。間違えないようにご自分の目・手で確かめて、確かな商品をお選び下さい。

生産国による価格差の理由

日本では、羽毛原料のほぼ100%が輸入品です。そして、製品の生産国によって価格差が生じます。生産国はたくさんありますが、日本と中国を単純に比較してみましょう。品質基準、安全性、衛生面、貨幣価値、人件費、どれ一つとっても違います。特に安全性・衛生面は確かな製品選びのポイントです。

宣伝文句、価格に惑わされないで

ポーランド産ダックダウン使用、フランス産ダウン使用、イングランド産ホワイトダック使用、18点セットでいつもより安いふとんがあったとします。でも、ここでご注意ください。入っているダウンは5%や10%ではありませんか。フェザー95%、ダウン5%であれば「羽根ふとん」です。間違えそうですね。「実物を触れない、実物を見られない、聞き返すことが出来ない」は、危険三原則です。その上「安い」ときたら要注意です。

購入前にチェックしましょう

適正ラベルは付いていますか。日本羽毛製品協同組合のゴールドラベルは表示どおりのダウン混合率と鳥種、洗浄基準など、多くの基準を満たしています。強い不快な臭いや使用前からの羽毛出や埃などはあってはならないものです。そして何よりもゴールドラベルは日本製にしか付いていません。

羽毛ふとんをご購入されるとき、安いだけで飛びついては安物買いの銭失いとなってしまいます。

あなたの知識、間違っていないですか

羽毛ふとんの品質について、誤解されている事も数多くあります。ぜひここで正しい知識を持っていただき、ふとん選びにお役立てください。

ダウン率が高いと良いふとん？

本当に良い品質の羽毛であれば、保温性、吸湿、発散性などの機能にはそれほど大きな差はありません。しかし、未熟ダウンなどの粗悪なダウンが含まれていてもそれはダウン率に含まれます。つまりダウン率90%の羽毛ふとんよりも良質なダウンだけで作られたダウン80%の羽毛ふとんの方が温かくて快適な場合もあります。決め手は、ダウンの質とダウンパワーということになります。

ダックダウンよりも グースダウンの方が良い？

羽毛ふとんに使用する羽毛原料は、水鳥の羽毛を使用します。水鳥にはダック(鴨)、グース(鵞鳥)があり、グースは飼育期間がダックよりも長いので、ダウンの弾力性、ダウンパワーに優れています。しかしダックにも親鳥のように飼育期間の長い鳥がいます。よって、一概にグースの方がダックよりも優れているとは言えません。成熟しているダウンであることが品質の条件になります。

ダウンの色はグレーよりも ホワイトの方が高級？

ダウンには、グレーダックダウン、ホワイトダックダウン、ホワイトグースダウン、シルバークースダウンなどがあり、色によって品質の差はありません。ただ、日本人は白に敏感に反応し、清潔で清らかなイメージを持つため自然と白い羽毛のイメージが先行し高級感を漂わせてしまいます。そのため、相場が単純に上がり高価になっています。色による差別はいけません。

羽毛量が多いほど 温かくて良い羽毛ふとん？

羽毛ふとんは、軽くて温かいのが特徴です。良質の羽毛はダウンパワーがあるため適正量で十分暖かいのです。重いふとんでは、ふとんが体にぴったりと沿い、暖かい空気を外に逃がさない大切な機能である「ドレープ性」が損なわれることもあり、単純に羽毛量で品質は計れないのです。

ふとんとダニについて

寄稿 白井秀治

ITEA東京環境アレルギー研究所 所長

専門は、アレルギーに関わる室内環境整備。所属学会は、日本アレルギー学会ほか。

アレルギーの影響や除去について、講演やテレビなどで対策を啓発している。

ダニは寝具に限らず条件が整えば、家庭内から珍しくなく見つかる小さな生き物である。中でもチリダニと呼ばれるダニの糞や死骸が、アレルギーに関わる微細なホコリとして重視されている。

医師はダニアレルギーの対応として、寝具のダニ対策を重視するが、これにはいくつかの理由がある。ダニの糞や死骸は、常時空中を浮遊するものではなく、多くは寝具を上げ下げするときに、空中の浮遊量が顕著に増加する。布団のダニ汚染が少ないと、これらの浮遊量は少なくなる。従って、布団からダニの糞や死骸といったホコリを除去することは、個人の暴露回避策として重要な意味を持つ。

最近、布団用クリーナーといわれる布団用の掃除機が多く売られている。筆者の記憶では、1980年代より掃除機掛けによる布団のダニ対策が行われてきた。日常のふとんの管理として、アレルギー学会のガイドラインでは、家庭用の掃除機を用いて1平方メートル当た

り20秒以上の時間をかけ、布団の表裏に週1回以上掃除機を掛けることが提唱されている。その他、布団を丸洗いすることで、ダニの糞や死骸の汚染が減少することが、免疫科学的な手法で確認されている。多くの家庭では、布団の天日干しが行われる。乾燥させる故に、ダニの増殖抑制効果が期待される。しかし、これだけでは根本的なダニ対策にはなりにくく、死骸や糞といったホコリを取り除くために、掃除機掛けや、時に丸洗いといった物理的な手法を併用したい。

ダニがアレルギーの原因として明らかになってから、50年弱経過した。ダニを生活環境からゼロにすることは、なかなか困難であろう。ダニの存在を肯定した場合、家庭内では、寝具を手入れして使用することが重要である。また、布団製造者にあっては、熱処理やダニの通過を抑制する構造や製法を用いる等、製法や製品についても、ぜひダニに対する工夫が行われることを期待したい。

日本羽毛製品協同組合より

日本で精製された羽毛は、その過程で熱処理を行っているため、ダニをはじめとする害虫を完全に死滅させているため、羽毛から虫が湧くことはありません。

羽毛ふとんのクリーニング

人は一生の約3分の1を布団の中で過ごします。毎日使用するものなのに、何故まだまだ布団をクリーニングされない方々がいらっしゃるのでしょうか。それは、布団をクリーニングする、ということが、まだ習慣になってい



いからです。

ある消費者アンケートでは「布団が汚れてきたらどうされますか？」の質問に8割の方々が「洗いたい」と回答されています。しかしながら「布団をクリーニングされたことがありますか？」の質問には、半数以上の方々が「洗ったことがない」と回答されています。

当協会への消費者の方々からのご質問で最も多いのが「洗っても大丈夫なんでしょうか？」「どこで洗ったらよいのでしょうか？」の2つです。

もちろん布団は洗えます。羽毛ふとんの場

合は、長く使っていると側生地が汚れるだけでなく、人の体から出る汗・埃などが側生地や羽毛にも付いてしまうため、羽毛のパワーが弱くなってしまいます。クリーニングの目安としては、干しても羽毛が復元しなくなった時に出すとよいでしょう。水洗いクリーニングにより羽毛のカサが戻ります。充填されている羽毛は「水洗い」をすることにより汚れが落ち、かさ高（ふくらみ具合）も回復します。アレルギーの原因であるダニの糞や死骸は多量の水で洗うことにより流れ落ちます。

ご自宅ではできない羽毛ふとんのクリーニングは、全国ふとんクリーニング協会加盟のクリーニング店や工場で承ります。詳細はお近くのクリーニング店または、全国ふとんクリーニング協会までお問い合わせください。



全国ふとんクリーニング協会 東京都大田区東雪谷3-12-16 電話03(3726)0872

全国ふとんクリーニング協会は消費者の皆様安心して布団をクリーニングしていただけるよう「ふとんクリーニングの普及・推進」を主目的として20年前に設立された、ふとんクリーニング業者の唯一の全国組織です。

グースとダックの 農場からのレポート



羽毛の起源

羽毛ふとんやダウンジャケットに使われ、暮らしに無くてはならない物になっている羽毛は軽くて保温力に優れた天然素材ですが、そもそも何故鳥には羽根があるのでしょうか。

空を飛ぶため?体温の保護のため?実は生物学者の間でも長く議論され、未だに結論の出ないテーマのようです。人類にとって、鳥の翼は憧れの的でした。いくら技術が進歩しようとも、鳥の羽根ほど精巧な素材は発明されていません。

鳥の風切羽根は風圧に耐えられるよう左右非対称で頑丈に作られ、しなやかで復元性に富んでいます。羽根の中央には羽軸があり、そこから羽枝(うし)がはえ、更に細い小羽枝が生えています。小羽枝の先端には小さなフックが付いていて、これが隣の小羽枝のフックとかみ合うことで軽くて強靱な一枚の羽弁が出来上がります。

こうした羽根の仕組みはどのように形作られたのでしょうか。19世紀、ドイツで爬虫類の特徴を持つ鳥「始祖鳥」の化石が発見されました。ダーウィンは鳥類は爬虫類から進化、枝分かれしたのだと考え、羽根は爬虫類のうろこが進化したものであると信じていました。爬虫類が木から木へと飛び移るために羽根が必要になったのだという仮説です。

ところが、1996年中国で発見された恐竜の化石から驚くべきことが判明します。恐竜の背中と尾に中空の繊維状の組織が生えていたのです。その後、羽根を持つ恐竜の化石が次々と発見され羽根の進化の歴史がだんだんわかってきました。ふわふわした羽根から羽軸のある左右対称の羽根まで様々な種類の羽根を持つ恐竜が地上で活動していたのです。このことは羽根が飛行能力を得るために進化したのではなく、保温のために進化したという説を生むきっかけとなりました。

更には、孔雀のように「見せるために」羽根が発達したという説も浮上しています。現在の鳥類も色とりどりのデザインが目を引きまします。発見された羽根の化石のなかにメラノソームという色素が見つかったため、恐竜も色とりどりの羽根を持っていたと考えられているのです。

結果として羽根を生やした恐竜あるいは爬虫類の中のただ一系統だけが羽根を利用して空を飛ぶようになりました。しかも、元々別の理由で生やしてあった羽根を利用して飛行能力を身につけたのです。しかし、未だに羽毛恐竜がいつ、どうやって空を飛ぶようになったのかという議論は生物学者の間で続けられているようです。

「羽毛ふとんの羽毛」



羽毛ふとんメーカー「安心堂」の若社長「安心くん」。羽毛ふとんのことや原料の羽毛の事などを、皆様にわかりやすく解説します。今回は、羽毛の採取についての誤解をとくために…。

羽毛ふとんに使用される羽毛は、家禽化された水鳥の羽毛を使用しています。家禽化された水鳥とは、食肉用に育てられた水鳥のことを言います。羽毛業界では羽毛寝具等に使用している羽毛は、この食肉用の水鳥から食肉以外に排出された副産物の羽毛を、ただ捨てるだけでは「もったいない」という発想からこの羽毛を羽毛ふとん用原料として有効活用しています。一部の消費者の方にはまだ多少の誤解があるようですが、あくまでも副産物の利用であり、羽毛ふとん製造のために水鳥を屠殺しているのではないということをご理解いただきたいのです。

一方、ヨーロッパでは、食肉の水鳥数は厳しく管理されているため一羽の水鳥から如何に多くの羽毛を採取するかということから、生きていう水鳥から羽毛を年に2から3回採取するという方法が行われた時代があります。これは水鳥の羽毛が生え変わる換羽期に、手摘みの専門家によって羽毛を傷めないように生えかわりを手助けし採取するという方法です。人が手助けすることでより丈夫で強い羽毛に生え変わり、寒い冬を越すために役立つと考えられ、また、上質な羽毛として扱われたこともありましたが、最近では動物愛護団体からの指摘を受け自主的に行われなくなっています。このような事情により、上質であるべき羽毛の逆を証明する生きた

鳥から採取した羽毛ではないことを認定するような証明書を発行する動きも出てきています。

私たちが天然の羽毛を使用して羽毛ふとんを造り続けているのは、天然の素材に勝るものはないと確信しているからです。鳥類の歴史が始まり鳥類の生命を守り進化し続けたのはこの天然の羽毛なのです。人間の化学力とは人工的に天然に近いものを如何に創るかという技術です。シルクを求めたポリエステル、羊毛も求めたアクリル等がよい例ですが、追いつくことは出来ていません。科学は日進月歩で進化しています。しかし、羽毛に勝る化学繊維は未だ出来ていません。私たちは、最高の眠りをご提供するために水鳥たちからの天然の恵みを活用させていただいているのです。

